

ひまわりからの メッセージ

177号

2026.10.19.

NPO ひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター

発行人: 中野たみ子

NHKの朝のドラマ

「風薫る」を見終わって



NHKの朝のドラマ「風薫る」が終了しました。皆さんは観ていらっしゃいましたか。明治時代に看護婦という職業を世に広めていった女性の物語でしたが、その中に私たちのように子ども達とかかわる者にも通じるのでは……と思った台詞がありました。前半には、「よく観察する」ということは、後半には「看護婦にとつての最も基本となることは、病人がいちいち口にせずとも、その顔つきや態度のちょっとした変化から気分や体調を察する力をもつことです」ということばです。特に後半のことばで、「看護婦」を教師や保育、療育士に、「病人」を子どもに置きかえてみたらどうでしょう。発語のない子、ことはが幼い子、「言ってごらん」と促さ

れても言えない子など、言葉で表現できない子ども達の言いたいこと、言おうとしている心の叫びを、私達はどれ程聴き取っているでしょうか。子ども達の心の奥底まで理解しようとしているでしょうか。わが身に立ちかえって、そんなことを考えながらドラマを観終わりました。

昔、女性が職に就くということは本当に大変だったようです。私の母は地主と言われた家に生まれましたが、代用教員として女学校で手芸を教えることになった時には、母の姉達の嫁つぎ先から「職業婦人を出すような家とは絶縁だ」と言われて親戚づきあいが無くなったそうですから、今の時代からは考えられない世の中だったのでしょう。でも「風薫る」を観ていて、そんな時代の女性の先駆者が今の私達につないでくれているんだと改めて思ったことでした。

ほんとがす

今、庭先で杜鵑草が咲き始めました。日々喰いあらされた葉が多くなってききましたが、葉の裏には瑠璃蛸蝶（るりたては）の幼虫（毛虫）が隠れています。毛虫が苦手な私が杜鵑草の葉裏の幼虫の育ちを日々楽しみにしているなど誰が想像できるでしょう。でも、黒い翅の背面に外縁に平行した青い帯のある蝶を見られたことはきつとあるはず。きれいな成虫になるといいなあ……毎朝の楽しみの一つなのです。

赤ちゃんが

おしゃべりするまで



子どもの発達について、早期に気づいてあげて、関わり方について工夫していくことは大切なことだと思おうのですが、「ことばの指導」や「知能検査の実施」など、より早期にという風潮を見聞きすることが増えました。それが本当に必要なかどうか、私には分かりませんが、基本に立ち返って、ことばの発達や人との関係について少し書いてみることにしました。

誕生の時、赤ちゃんは原始反射と呼ばれるものをもって生まれて来ます。生きていくためには、赤ちゃんにはママのお乳を吸う力が必要です。お乳の位置もわからないと困ります。ですから、赤ちゃんには、吸啜反射（きゅうてつはんしゃ）といって吸う反射と探索反射といって探す反射が生まれつき備わっているのです。誕生と同時に肺呼吸に切りかわった呼吸と吸うという唇の動きは、その後のことばの発達にも重要な役割を果たしていきます。

一方、運動発達の面でも、誕生の時の赤ちゃんは、非対称性頸反射（顔が向いた方の手を伸ばし、反対の肘も

曲げている）「把握反射（手を握る）」などといった原始反射が見られます。こういった原始反射は、赤ちゃんの脳が発達していくに従って、より高次の立ち直り反応などに統合されて行きます。そして倒れても自分の身を守れるように保護伸展反応（転ぶときに手を出す）も身につけつつ歩行へと進んでいきます。

人間の一生のうちで一番脳の可塑性が高い時期は乳児期だと言われますが、つまり、変化する時期と考えられます。脳の栄養は、抱っこによるスキンシップや、ママや周りの人からのことばかけですが、無言でおむつ替えをしたりお乳を飲ませながらスマホを見ているなんてことはないでしょうか。赤ちゃんに目を向けるよりもスマホに熱中しているママがいるとしたら、赤ちゃんの脳は栄養不足になっているかもしれません。

ことばや社会性の発達にとって母と子の関わりは、対人関係の基礎になるもので、大人の声かけに「ほほえみ返し」してくれるのは、赤ちゃんの中で人への関心の芽生えができてきているということでしょう。

さて、ことばの発達に話を戻します。哺乳期から、離乳食へと移っていく時、発音のための舌の動きが作られていきます。離乳初期の舌は前後に動いています。離乳中期には舌の

動きは上下に、離乳後期になると左右の動きになって来ます。そして食べ物や飲み込む時には、唇を閉じます。もうろん、離乳食を食べさせながら「おいしいね」「おうち開けて」「ゴックン、上手ね」などというようなことはかけは不可欠です。ここの母子の関係の中で「愛着」が育つていくわけです。離乳初期は五ヶ月、中期は七ヶ月、後期は九ヶ月頃です。哺乳期に吸う力が弱いと、哺乳びんの乳首の穴を大きくしがちですが、唇のまわりの口輪筋や下あごのオトガイ筋などが育たないので注意が必要です。

さて、発声という面から考えると、離乳初期くらいから、のどの奥を使うウクンというような声を出し始めます。そして、六ヶ月になると、ママとママ以外の人を見分けるようになり、ママ以外の人と泣くようになり、ママと人見知りといわれる現象ですが、昔は人見知りの無さを自閉症の気づきの一つと言われたこともありましたが、現在はどうか。人にもまれて育つ子が多い現在です。人見知りから愛着をはかることなど無意味かもしれません。

運動面では、頭がすわり、寝返りし、うつ伏せ姿勢から這い這いするようになって来ると、子どもたちは目に入

た物や興味をもった物に向かって動き出します。ママたちは目が離せません。けれど、この這い這いの時期は、右手、左手、右足、左足の協調動作の時期です。方向転換しようとするのは腰の回旋も足の指の蹴りも必要です。とても大切な時期なのに、赤ちゃんを取り巻く大人たちは、早く歩いてくれることを期待します。「発達性協調運動障害」の原因はよく分かりませんが、赤ちゃん時代からの体の発達と無関係ではないように思えるのですが……。

自分で動けるようになって、赤ちゃんたちは、何でも自分の手が届くわけではありません。興味のある物に手を伸ばし、声を出してママを呼びます。手差しと言われるものです。その時、ママはどんな対応をしてくれるでしょうか。まさか知らん顔してスマホに夢中なんてことはないでしょうが、「ハイ、これ」と、代名詞を言そ渡してくれるのでしょうか。いいえ、きちんと物の名を伝えてあげることが必要ですね。

赤ちゃんの行動は、手差しから、指差しへと変化してきますが、この時期は、ママとの間に共感関係が育っているのかどうかを見極める大事な時期であり、私たちは、この頃のお子さんの指差しや音声を「ことばの前のことば」として、とても大切に考えています。十ヶ月健診の頃です。

この時期にしっかり見ていかなければいけないこととして、①呼名反応②共同注意ということが言われます。名前を呼んだら振り向いてくれるのか、ママが指差した物に目を向けて、一緒に見る事ができるかどうか、です。もちろん、ママを振り返って見てくれることも共感の大事な一面です。

十ヶ月になってお座りはできるけれど、自分で姿勢をかえて這い這いしていくことがなく、ずっと座っているとしたり「うちの子は、おとなしくて手がかからず助かります。」等と言っている場合ではありません。「余り目は合わなくて一人で遊んでいます。」も、大丈夫？と心配になります。人との共感が薄いと思われるようなら、おもちゃやスモを与えておくのではなく、ママやパパという「人」がかかわる遊びを十分にすることがあるのです。それは、園生活でも同じことです。

言葉は、訓練したら話せるようになるわけではありません。人と人との関係性の中でしか育たないのです。意味のあることとは（有意味語）がしゃべれない段階から、人と共感してほしいという思いを持ち、その思いをしっかりと受け止めてくれる大人の存在が無ければ、発語として育って来ないのです。

生後一年経つと、赤ちゃんは歩けるようになってきます。そして、同じ頃に有意味語が出はじめます。もちろん個人差

はありますが、赤ちゃんが初語（始語ともいいます）が話せるようになるまでには、少くとも知っている言葉（理解言語）が一〇〇語は必要だと言われています。自分の名や、パパ、ママ、「ちょうだい」、「タメー」など日常的に使われることは、理解は、大人の話しかけなければ覚えしていくことはできません。

昔は、一歳半になれば八割の子が初語を獲得してしましたから、二歳まで待つて発語がなければ療育につなげていくようにしていましたが、今は全体的に発語の時期が遅くなっているようです。原因は不明ですが、初語の遅れがその後の語いの少なさや表現力の弱さ、言葉からイメージを広げていく力（言語的推理）にどうつながっていくのかは分かりません。けれども社会の変化は確実に子ども達に育っていく言語環境に影響を及ぼしていくのではないでしょう。

次回はことばの発達とことばの指導等にふれていきます。いので、メッセージの発行日を少し早めたいと思っています。

11月の予定

4日(木)ピアサポート

16日(月)親の会

<研修会>

2日(月)ひまわり学園

4日(水)大垣園長会

12日(木)みらい(海津)

18日(木)療育スタッフ

19日(木)社スポ

ケース検討会

26日(木)池田ことばの教室

相談会、親の会など

成人相談日

6日 金井町

9日 揖斐川

10日 養老

27日 神戸

